

今月の星空



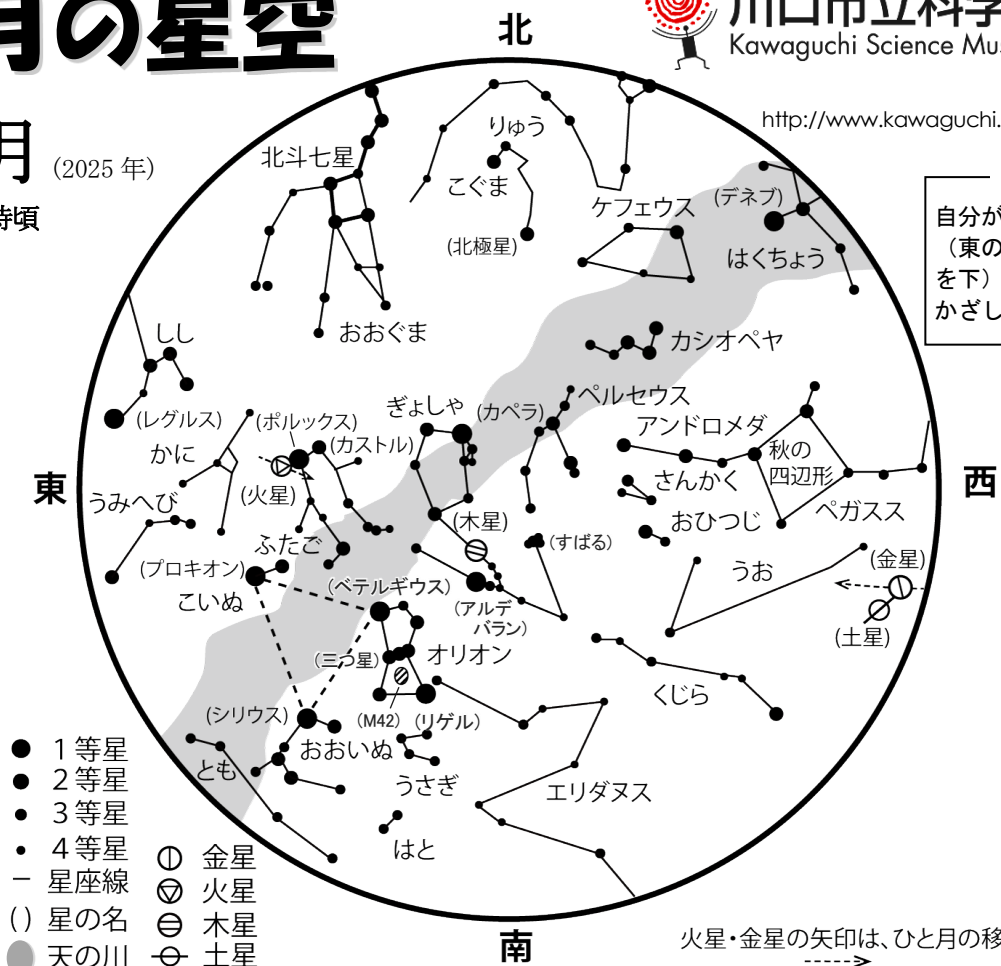
川口市立科学館
Kawaguchi Science Museum



tel 048(262)8431

http://www.kawaguchi.science.museum/

1月 (2025年)
中旬 20時頃



月 齢 ● 上弦 7日、○ 満月 14日、◐ 下弦 22日、● 新月 29日

惑星情報

金星 日の入後 南西(みずがめ→うお座 -4→-5等) 火星 夜のはじめ頃 東(かに→ふたご座 -1等)
木星 夜のはじめ頃 南東→南(おうし座 -3等) 土星 夜のはじめ頃 南西→西(みずがめ座 1等)

★オリオン座の魅力

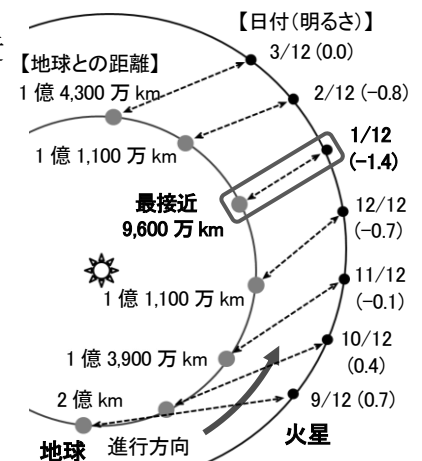
冬を代表するオリオン座が南の空に昇ってきました。この星座は、1等星や2等星の明るい星が多く目立つ星座であるだけでなく、個々の天体も個性豊かです。中でも1等星の「ベテルギウス」は、その一生の終末期である赤色超巨星の段階にあり、大きさは太陽直径のおよそ800倍。いずれ超新星爆発を起こすとされる注目の天体です。また、「オリオン大星雲 (M42)」は、星形成の現場として知られ、望遠鏡を使えば、鳥が羽を広げたような星雲の姿に加え、中心部に「トラペジウム」という星団も見ることができます。見かけの大きさが大きく明るいため、肉眼でもぼんやりとその存在がわかるほどです。

★1月12日 火星が地球に最接近～2年に一度の観望好機～

12日、火星が地球に最も近づく「最接近」となり、見頃を迎えます。最接近とは、右図のとおり、異なる速さで公転する地球と火星が横並びになる（地球が火星を追い抜く）瞬間のことで、約2年2か月ごとに起こります。

- 最接近時の特徴**
- ・明るく見える（今回の最大光度は-1.4等）
 - ・望遠鏡で観察すると表面の様子（模様）が観察しやすい

また、地球から見ると見かけの位置の変化も大きいため、明るさの変化とともに、1月から2月にかけては、近くにあるポルックス（1.2等、ふたご座）に近づいては離れていく様子が観察できるでしょう。



ステラナビゲータ11を元に作成
図 地球と火星が接近する様子
(地球との距離と火星の明るさ)

コラム ～十二支と木星～ 今年の干支（十二支）は“巳（み・へび）”。中国から伝わった「十二支」は、西洋起源の黄道十二星座に似た、12に分けられた天の領域を表す「十二次」が由来です。公転周期が約12年の木星（中国では歳星と呼ぶ）の位置を十二次で数える「歳星紀年法」が、やがて十二支を用いた紀年法（西暦など、年を数える方法）に変化していきました。現在、おうし座に位置する木星は1年後、隣のふたご座に移ります。